茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.101

游美

Contents

1　木村 利（とおる）さんの作品と作品についての言葉
2　作家探訪　迫 二郎先生
3　美に游ぶ
4　美術鑑賞旅行
5　どっちがどっち？ いわい としお×岩井俊雄
　　絵画教室
6　心に残る私の一点
　　あとがき

木村　利（とおる）「活力あるサンマルコ広場」

2007年／淡彩画・スケッチ／F6号

旅は建築士を育てると信じ、新婚旅行を皮切りに世界各地を歩いてきた。

この作品も2007年10月に「カプリ島とナポリ、ポンペイ遺跡を巡るイタリアの魅力のすべて九日間」のツアーに妻と参加した時サンマルコ広場での作である。私は三度目のベネチアでサンマルコ寺院もベネチアングラス工房も既に二度見学している。そこで添乗員にお願いしてその時間をフリータイムにして頂いた。絵を描くこの一時間が勝負。広場は人、人で混み合っていた。中央より少し横に場所を確保し、段ボールの箱を組立て据付ける。これが私のイーゼル。人混みの人達は何が始まるのかとガヤガヤし出す。私が絵を描くのだと分かると彼らは親切に前方を開けてくれた。みっともない絵は描けないな、と心の中で呟く。周りの話し声が気にならなくなって三十分。完成する。勿論淡彩画で色も付けてある。ずっと見ていた一人が微笑みかける。私も緊張から解きほぐされて微笑み返す。言葉が通じないのが残念。しかしこの情景がいつまでも印象強く残っている。　（水戸市在住）

茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.102

游美

Contents

1　古谷 行雄さんの作品と作品についての言葉
2　作家探訪　川瀬 伊人先生
3　美に游ぶ
4　美術鑑賞旅行
5　「辻 永　ふたつの顔を持つ画家」展を観て
　　ワークショップ
6　心に残る私の一点
　　あとがき

古谷　行雄「鏡桜」
2020年
岩絵の具・西の内五介和紙
F20号

2019年4月朝の新聞を読むと、福島県二本松市の桜の記事が目に入りました。中島の地蔵桜*という記事でした。夜間はライトアップし木下には水を張った池があるという内容でした。地元の人たちが長年守ってきた桜です。私はすぐに出かけたくなり、その日の午後出かけました。午後5時ごろ桜の所に着いてみると、多くのカメラマンが思い思いの場所で日暮れを待っていました。遠くには山脈があり、少しずつ日が落ち始め夕日が水面に映り込んできました。地元のボランティアの人が色々と説明をして下さいました。日が沈み始めると、ライトアップされた桜と背景の空が白から青く群青色に変化してきました。今までこんなに空を意識して見たことがありませんでした。刻々と変化する桜。今日は風も無く静かな水面に鏡のように桜が映り込んでいました。何と素晴らしい景色なのだろうとカメラのシャッターを切りながら、どう描けばよいのかと少し考えました。午後8時過ぎに人影もまばらになり、自分の目に桜の思いを焼き付けながら帰路につくことにしました。　（小美玉市在住）

＊編集者注：「中島の地蔵桜」所在地　福島県二本松市針道字中島46番地

茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.103

游美

Contents

1　助川 睦枝さんの作品と作品についての言葉
2　作家探訪　入江 英子先生
3　学芸員に聞く　木澤 沙羅 学芸員
4　美に游ぶ
5　友の会2023年新春講演会「速水御舟」展を観て
6　心に残る私の一点
理事会・代議員会報告
あとがき

助川 睦枝「老木に咲く花」
2008年／パステル用ボード・パステル／F20号

長い間共に暮らしてきた猫が、すっかり弱りました。

パステル画を描きはじめてから、猫の絵を描く楽しみを見つけました。今まで気づかなかった猫の表情に、感情の高ぶりやほしい物をねだる声などと一緒に、微妙な顔の変化を見ることが深くなりました。スケッチすると、いい線をとらえることができてうれしくなります。その猫の命が終ってしまうことを考えると、必死になりました。

その姿を描きました。猫の最後の姿を、ふっくらと真っ白にしました。私は梅の木になって、猫を抱くように枝をのばし花を咲かせました。長い長い間、パステル画教室で指導していただいたのは七字純子先生です。人の心を動かすことのできる心を持った先生と出会ったことに深く感謝致しております（先生は現在茨城県芸術祭美術展覧会の委員でデザイン部門の審査員を務めていらっしゃいます）。

（那珂市在住）

茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.104

游美

Contents

1　川﨑 ひろ子さんの作品と作品についての言葉
2　作家探訪　鎌田 理絵先生
3　美術鑑賞旅行
4　美に游ぶ
5　絵画教室
　学芸員による鑑賞講座
6　2023年度役員・委員及び法人・特別会員の紹介
　2023年度海外美術鑑賞旅行について
　あとがき

川﨑 ひろ子
「気のむくまま」
2013年
ボールペン／ケント紙
51.5×36.5cm

2013年の頃に描いたもので「気のむくまま」です。

このような絵は、病院の待ち時間に描き出したのが始まりです。普通のボールペン１本で、ケント紙に下描きもせず、ただ、手が動くままに何も考えずに描いています。時には線が乱れても、それはそれで新しいひらめきで、手を休めることなくどんどん描き進めます。

私は物心付いた頃からいつも絵を描いていました。初めはクレヨン、水彩、高校で初めて油絵を、大子町にお住まいの武石絹江先生のご指導を受けました。

社会人になってからは、会社の美術部で、社内外のグループ展等に参加していました。

私は、先生方のご指導は受けず、受けたいとも思いましたが、他にやりたいことがたくさんあり、絵にとらわれたくありませんでした。ずっと風景の油絵でしたが、四十代前頃から水彩で草花を描くようになり、今はほとんど植物画になっています。これからもずっと描き続けていくつもりです。

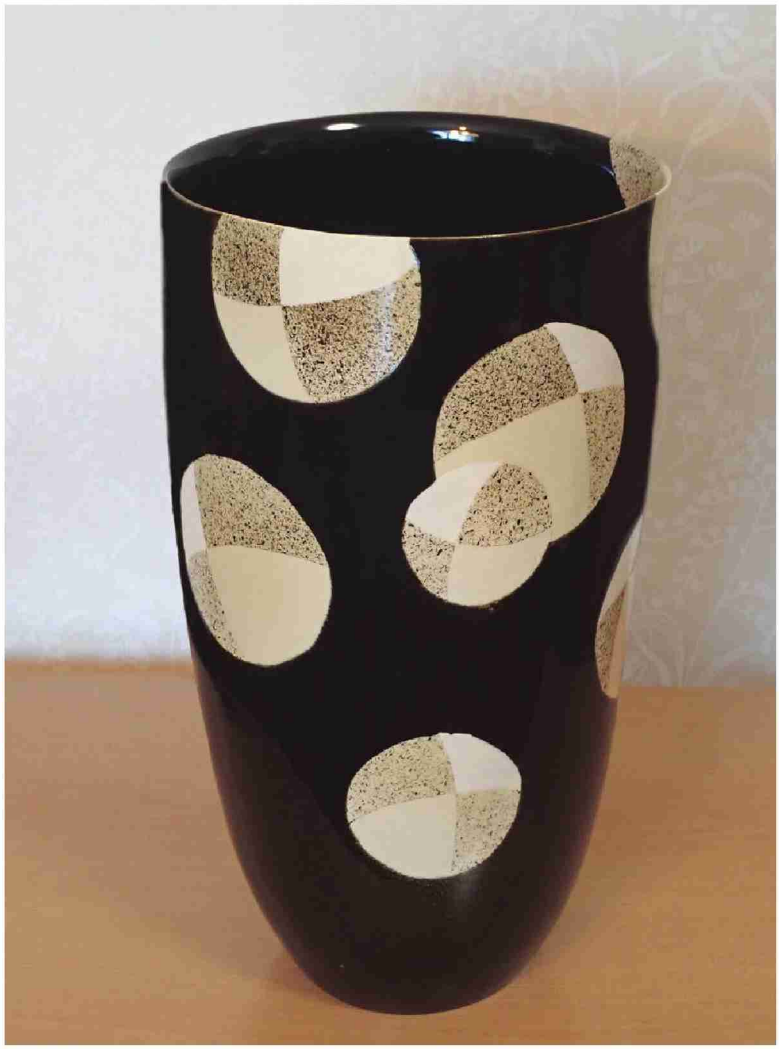
（ひたちなか市在住）

茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.105

游美

Contents

1　小原 えり子さんの作品と作品についての言葉
2　作家探訪　宮本 覚次郎先生
3　美術鑑賞旅行
4　美に游ぶ
5　学芸員による鑑賞講座 令和5年度 美術館アカデミー
6　心に残る私の一点
あとがき



小原 えり子
「鉄絵丸文花器」
2023年
21×21×39cm

黒い地に丸いものが浮かんでいる模様をデザインする時は、どうしたら「ゆらり、ゆらゆら」「ふわふわ」しているように見えるか、どんな配置にしたらよいのか毎回悩みます。

重い陶器ですが、軽やかさを感じられるデザインを考えます。風船、シャボン玉や数年前県立歴史館のいちょう祭りで見たスカイランタンもヒントになります。笠間陶芸美術館の陶芸展はもちろん、近代美術館の絵画展からも刺激を受けています。

陶芸に出会ったのは30年以上も前のことです。友人に誘われて参加した講習会で、自分の手が形ある物を作りだすことが出来る事に感動し、すぐ入会しました。千葉に住んでいる時、工芸会で活躍されている神谷紀雄先生のご指導を受ける縁に恵まれ今に至っています。先生は「自分らしい作品を作りなさい。良いものを沢山見てまず自分が感動することが大切です」とおっしゃいます。

昨年秋の茨城県展で思いがけず会友賞を頂くことが出来ました。作品を作る時はいつも果たしてこれで良いのか迷いますが、その迷う時間も楽しみながら続けていきたいと思います。

（水戸市在住）

茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.106

游美

Contents

1　山田 一二さんの作品と作品についての言葉
2-3　美術鑑賞旅行
4　作家探訪　橋本 弘幸先生
5　美に游ぶ
6　企画展報告
お知らせ
あとがき

山田 一二「悠久のカッパドキア」

2016年／油彩・カンヴァス／F80号／2016年茨城県展

1994年初回だったか、友の会海外美術鑑賞旅行中世界でどこが最も面白かったかという話が出た。当時事務局長だった筧先生が「カッパドキア」と言われたことが忘れられない。地名だけは耳にしたことがあった。

それから約20年後の2015年4月、ついにそのカッパドキアを訪れる時が来た。トロイ遺跡に近いチャナッカレの国立大学に、1993年日本語学科が設立された。友人が学科長として赴任し、学科立ち上げ業務から日本語教育に尽力し、20余年勤め、退任した年のことである。退官記念にと、一緒に約半月のトルコ国内旅行をした。

ヒッタイトのハットゥシャからローマ、オスマントルコ時代、そして現代トルコを巡る旅は終始刺激的だった。何よりも「カッパドキア」は、地球的時間を感じる最高の3次元カンヴァスだった。

翌2016年、その感動をカンヴァスに必死に描き、そっと私たち3人も描き入れた。その作品が、県展で美術館に展示された。今も私のPCの待ち受け画面にしている。

今年、友の会の旅行で3度目のトルコを訪れた。駆け足の旅にもかかわらず、やはり魅力的だった。

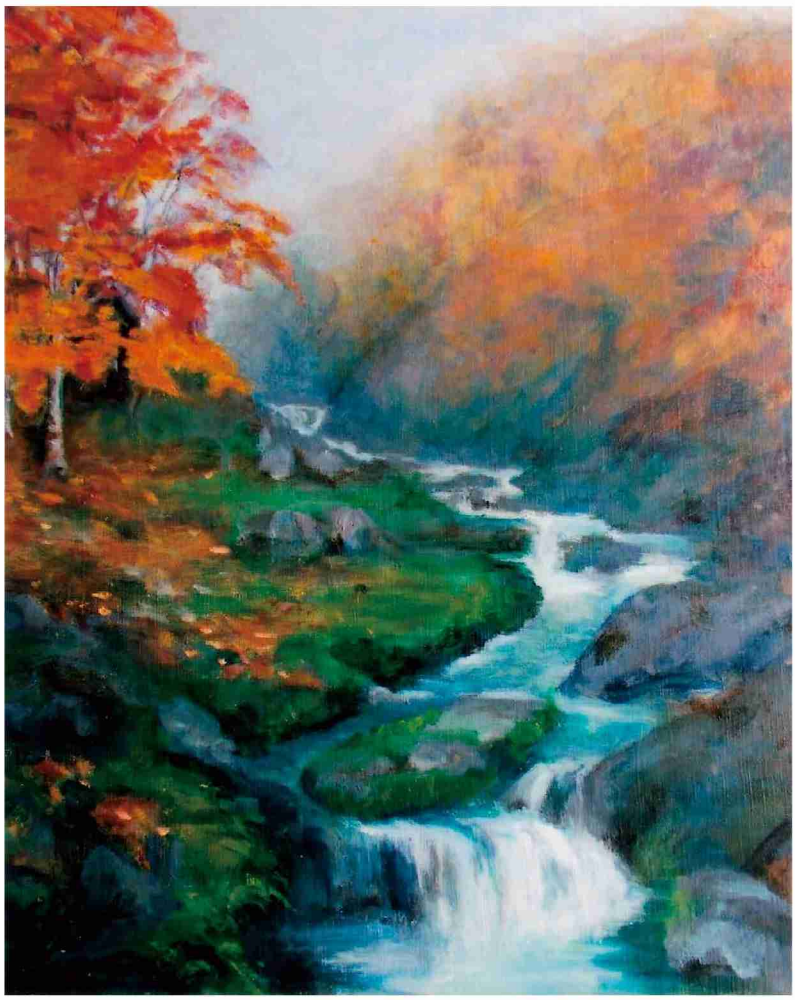
（日立市在住）

茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.107

游美

Contents

1　菊池 三郎さんの作品と作品についての言葉
2　新館長のご挨拶
3　美術鑑賞旅行
4　作家探訪　磯崎 俊光先生
5　美に游ぶ
6　学芸員に聞く
7　理事会・代議員会報告
　　会員のためのギャラリートーク
8　デッサン講習会・お知らせ
　　あとがき



菊池三郎　「幽谷の秋」

2014年／油彩・カンヴァス／F10号／2018年友の会会員作品展

この風景に出会ってから、すでに10年が過ぎました。ある団体旅行の一員として訪れた、晩秋の蓼科高原・白樺湖近くの風景です。川霧が薄れゆく中の渓流がとても印象的で、朝食もそこそこに出発間際まで、夢中でスケッチし、カメラに収めた記憶が鮮明に残っています。

帰宅後、すぐ制作に取り掛かりましたが、素人の悲しさ、なかなかイメージどおりに描けず、県北の渓流沿いや福島の山間にも足を運んで仕上げた、苦心の1枚となりました。

友の会には古くからお世話になり、会が主催する絵画鑑賞会や絵画講座などに参加して、絵を描く楽しさを実感し、又同好の友人達も増えました。

絵を描く人達も高齢化し、昨年度の県芸術祭洋画部門の入選者の7割以上が70歳以上とのこと、自分もまだまだ老け込むでもなし、下手な絵を楽しんでゆきたいと思うこの頃です。

（常陸大宮市在住）